

## 交配と繁殖

無知！

「もしもし、お宅ラブドールのクラブですか？」

「はい、そうですが・・・どちら様で・・・」

「うちのにシーズンがきたらしいんで、仔犬採りたいんだけど、どっかに安くかけてくれる良い牡いない？」

この頃は、電話の掛け方も知らない方が多いようだ。だから、かどうかわからないが、ノイは電話が大嫌いである。ギョロリと白い目を見せて溜め息とともに、ごろりと足元に横になる。

「『シーズンがきたらしい』って、いつ始ったんですか？」

「今月の半ば頃だと思っただけど。」

「『思っ』って、交配に適した日はシーズンが始まってから十二〜三日目が目安ですから、始まった日ははっきりしないと、いつ交配させたらよいか決まりませんね。早過ぎても遅過ぎても赤ちゃんはできませんよ。『今月の半ば頃』ねえ、仮に十五日にシーズンが始まったとすれば、今日が丁度交配に適しますけど、今日すぐになっていうのは無理ですね。」

「明日か、しあさってなら仕事の具合が都合いいんだけど、どっかの牡、世話して貰えませ

んかねえ。」

「うちのクラブに犬で商売しようって人はいませんから、お金さえ出せばってわけには行きませんよ。可愛い自分の家の息子の子供が生まれるわけですから、それ相応に交配の相手を選びます。形質の遺伝も考えなければなりませんね。それに交配の場合は、女の子を男の子の家へ連れて行くことになるんですが、そこのお宅のご都合もあるでしょうし……今日すぐにというのは無理でしょう。」

「うちのは血統書もちゃんと付いてるし、ン拾万円で買ったんだけど……。」

「交配を成功させるためには良く慣れた人、獣医さんとか、訓練士さんなどに立ち会って手伝って貰わないと、うまく行かないことも多いのですよ。今回は見合わせて次のシーズンまでに自分の目で確かめて、良いお嬢さんを探したらいいかがです……お宅の子は何歳なんですか？」

「一年とちよっと、二ヶ月かな……。」

「えっ……まだ子供じゃないですか、早過ぎてかわいそうですよ。少なくとも二歳近くまで待って、身体も心もしっかり大人に成ってからにしてください。交配の前には、予め赤ちゃんとに免疫を伝えるために予防注射をしたり、産室の準備をしたり、お産の時に相談に乗ってもらえる獣医さんを探しておいたり、用意しなければならぬことも多いんですよ。」

「そうかね、まだ早いかね……。狂犬病の注射はしてあるんだけど……。違う注射……。犬のお産って、そんなに面倒なの？ 昔飼ってたボチは勝手に縁の下で……。」

「グフーン！」

ノイ子が足元で大きなため息をつく。どうやら電話の内容に耳を澄ませているらしい。

「ラブラドルは人間の手で創り出された犬種ですから、野性を期待するのは無理なんです。大体、犬は安産っていうのも、純血種では迷信だと思った方がいいでしょう。初めてお産する大型犬の場合は、人間の手助けが必要な場合が多いですよ。仮に無事に生まれても、疲れて寝込んでしまった母親の体に押し潰されて、亡くなってしまった悲惨な例をたくさん知っています。お宅の子に子供を産ませるのならば、ラブラドルにお産をさせた経験のある人に、いろんな注意を良く聞いてからにしてください。」

こんな電話の受け答えをしていると、こちらはだんだん腹が立ってくる。言語道断、不埒千万。ノイの精神衛生にも良いはずはない。

ラブラドルを家族の一員に迎えるからには、好奇心丸出しの仔犬と同様、こちらも、あらゆる知識を貪欲に取り入れる覚悟でかからないと、犬にも人間にも不孝な結末がもたらされる。この場合、知らなかったは通用しない。まして、繁殖しようというのであれば、優良な形質を持った子供達を誕生させるために、知っておかなければならないことはごまんとある。

人間の場合もそうだけれど、「瓜の蔓になすびはならない」のである。遺伝子は良くも悪くも親の形質を子に伝える。子供が自分自身でその人生を切り開いて行ける人間の場合とは違って、今の世の中、人間に頼らなければ生きていけない犬たちが、欠陥を背負って生まれてきたら、幸福な一生を送れるはずはない。幸いにも、優しく確りした飼い主に巡り合って、その欠陥を補って貰いつつ一生を過ごせたとしても、総てにおいて健全な心身を備えていた方が、より楽しかったに違いない。

人間が、犬達の交配から繁殖まで、その管理下に置かねばならない以上、いい加減は許されない。けなげな命が絡む以上「知らなかった」では済まないのである。

惨！

「すこしお小遣い稼いで貰おうと思うんだけど、お宅のクラブに入れば、買いたい人なんかも世話してくれますか？」

こんな、とんでもない電話も時には飛び込んでくる。またかとノイ子は肩を落として、むこうの部屋へ行ってしまった。

「うちのクラブは愛犬家の集まりで、誰でもお入れするわけには行きませんし、商売じゃないから、売買のお手伝いはできません。大体、きちんと世話をして仔犬を産ませたら、獣医

さんの費用、母親の健康と母乳のために与えなければならぬ良質の食事代、仔犬たちの離乳食だつてばかになりませんよ。犬用の粉ミルクは人間の赤ちゃん用よりずっと高価だし、一ヶ月を超える頃にはドッグフードの袋がみるみるうちに空になるし。仔犬を譲る前には、それぞれに予防注射もしなければ危険だし、念のために寄生虫の検査をしたり、駆虫剤を与えたりする費用、可愛がつてくれる飼い主を探すための広告の費用と、数え上げたらきりがないですよ。出費の方がずっと多いですよ。その上、母犬は疲れていらついてないか、十頭位生まれる仔犬たちに産湯をつかわせ、みんな健やかに育っているか、成長に差がついていないか、異状はないかと気を使い、排便の始末から、離乳が始まれば一日四・五回の食事の世話と、それは、貴方がラブラドル大好き人間なら、これ以上楽しい仕事もないけれど、お金のためなら他の仕事を考えた方がずっと割がいいですよ。繁殖で儲けようなんてのはとんでもない考え違いです。」

「。。。。。」

こんな人たちに繁殖されたら、生を受けて誕生してきた仔犬たちが、かわいそうな運命を辿ることになるのは目に見えている。欲に目の眩んだ繁殖者の、もくろみ通り高価に売られた子は、それなりに大事にされるのかも知れないが、こういう繁殖者に限って、売れ残った仔犬がどんどん大きくなってくると、餌代もかかるし世話も大変になってくるところから、誰彼構わ

ず飼ってくれそうな人に、安くても押し付けてしまうようだ。

ラブの仔犬は悪戯の天才だ。頭の良い子ほど、この悪戯は果てしがないからたまらない。押し付けられた方も、最初からラブについての知識をもって、覚悟して家族に迎えたのなら、ラブの仔犬の悪戯には手こずりながらも、その対応は楽しいものとなるのだが、他の犬種と同じつもりで引き受けてしまった場合は、人間にとっても犬にとっても大悲劇である。

平成二年五月二十四日付け読売新聞朝刊神奈川版の、「はがきコーナー」と言う投書欄に、何ともやりきれない投書が載せられていた。お読みになった方もいらっしやると思うけれど、憤怒の思い忘れがたく、引用させて貰う。

「『犬の元飼い主様へ』

翻訳業・長谷川 愛 (埼玉県飯能市)

拝啓、黒のラブラドル・レトリバーのメスを捨てた元飼い主さま。

その犬は首輪をしていませんでしたが、性格のいい純粋犬種なので、首輪抜けしたと信じていました。しかし、翌日、保健所の職員が来ると、ある人が『この犬は車から捨てられたんです』と言いました。

収容車に入れられると、犬は暴れ、ドシンドシンと体をぶつける音がします。泣いている人もいました。捨てた人は、だれかに飼って貰えたと、都合よく推測するでしょうが、その場で見殺しにする者には修羅場です。その犬が抵抗しながら処分されたことをご報告申し上げ

げます。」

ついでにもう一つ、平成二年五月二十二日付け朝日新聞東京版の投書欄「ひととき」の記事も引用しておく。こちらは猫だけれど、けなげな命に違いはなからう。

「『ゴミ扱された子猫』 千葉県松戸市 中田 千津子 (会社員 88歳)

弟と二人で近くに住んでいる母から、生まれたばかりの子猫を拾ってきた、と連絡があった。中一の娘と母の家に行き、事情を聞いてがく然としました。まだへその緒もとれず、目も開かない二匹の子猫は、ポリ袋に空き缶や生ゴミと一緒に入れられ、口はかたく縛ってあったそうです。夜、勤め帰りの弟が、ゴミ置き場で猫の鳴く声を聞き、まさかと思ってゴミ袋のひもを解くと、二匹の猫が出てきたとのことでした。なんとひどいことをするのだろうと思いつながら、さっそく粉ミルク、ほ乳ビンを買ひ、メス猫は“ミヤコ”オス猫は“ゴンベエ”と名づけ、母の家で育てることにしました。

しかし不慣れた人間の手で、生まれたばかりの猫を育てるのはやはり無理だったのでしよう。五日目にミヤコが死に、六日目にゴンベエが弱ってきました。土曜日の午後、娘と私はゴンベエだけは助けたいと車に乗せ、動物病院を探し回りました。やっと病院を見つけましたが、私の目から見てももうだめだなと思いました。それでも娘が、『先生ゴンベエを助けてください』と涙をためて頼むと、病院の先生は強心剤、心臓マッサージと手を尽くしてく

れました。三十分後、死んだゴンベエを抱いて申し訳ないと診察室から出てきた先生を見て、私も娘もあたりかまわず泣いてしまいました。この世に生を受け、一週間もたたずに死んでいった猫たち。なんのために生まれてきたのでしょうか。

ゴミと一緒に捨て去って行った人間がいて、同じ人間として、その行為を許せない私たちにとって、せめて人間としての責任をとるためこの猫たちを助けたいと思いつながら、育てることができませんでした。ごめんね、ミヤコ、ゴンベエ。今、ミヤコとゴンベエは小さな小さな骨つばに納まり、動物愛護センターの納骨堂に眠っています。月一回、命日にせめて線香でも手向けたいと思っております。」

高校生だという女の子から掛かってきた電話を思い出す。

「ラブドールを飼っているんですけど、今度マンションに引っ越すことになって、飼えなくなるので、誰か飼ってくれる人を探してくれませんか？」

どこでクラブのことを聞いてくるのか知らないが、この手の電話は結構多い。どこで繁殖され、どういうルートで家族として迎え入れたのか尋ねると、血統書もなくしたままで繁殖者も判らず、譲ってくれた人も判らないと言う。

都会の住宅事情は、人にも犬にも苛酷である。おいそれと、次の飼い主が見つかる幸運は、そうざらには転がっていない。



「血統書がないと、こんな可愛い子を飼ってくれる人がいないんですか？ 血統書なんて紙切れなのに……。この子は間違いなくラブラドルレトリバーです。素直でとっても可愛い子なんです。」

少女の抗議は涙声である。

「そう。君は正しい。血統書なんて紙切れだ。そんな物が在ろうとなかろうと、可愛い子の実体に係わりはない。でも、それはその子が楽しい一生を無事に君の家で終えることができた場合の話だよ。子供を産んだり産ませたりしたくなくても、身元不明じゃ困るでしょ。君がもしも戸籍がなかったらどうなるの、どんなに可愛くても、優秀でも学校にも行けないし、結婚もできない、海外旅行にだって行けないんだよ。犬にとって血統書は戸籍と同じなの。なくしてしまったのは繁殖した人が判れば、また作って貰うことができるから良いけど、それより、そんな可愛い子をどうして人に譲らなければならぬの。家庭の事情は知らないけど、人間の子供だったらどうするの、何とか方法を他に探すでしょ。高校生の君には自分だけで処理できることじゃないかも知れないけど、犬だって飼い主と別れるのは君以上に辛いんだよ。犬が飼えないそのマンションに引越さなければ、人間の方には不都合があるんだろうけど、可愛い家族の一員を、他人に譲る以外の方法を、じっくりご両親ともう一度相談して解決法を見つけなさい。」

“自分の勝手な都合で犬を飼うな！ 将来の見通しもなく可愛いだけで犬を飼うからそういうことになる！ 飼った以上はどんな犠牲を払っても、最後まで責任を持って！” そう怒鳴りた  
い気持ちを押さえながらも、怒りは限りなく沸いてくる。高校生の少女に、そのラブラドル  
を買い与えた親、少女の手に負えない問題なのに、自分は隠れて少女に辛い電話を掛けさせる  
親、ラブラドルを飼う資格なんてない輩。飼われたラブラドルがかわいそう。できればす  
ぐにでも助け出しに飛んで行きたいが、それでは一時の感情でペットを飼うのと変わらない。  
欲しい人が、常時登録して待っているなんて制度もない。捨てられた犬や猫を引き取って、彼  
らの面倒を見るために住み慣れた都を捨て、田舎に居を構えたフラメンコの達人の心意気には  
賞賛を惜しまないけれど、当方未だその域には達していない。そんな電話を受けてしまった夜  
の酒は苦い。

かつて一世を風靡したチャンバラ劇で、萬屋錦之助扮する主人公の叫ぶセリフが懐かしい。

「てめえら、人間じゃねえや！ 叩っ斬ってやる！」

あーあ。あれは格好良かったなあ。

ふたりの会話が湿つてくると、ノイ子は、ことさら陽気にお尻を振りながら、ふたりの間に  
分け入って、べろべろ顔を嘗めに来る。

「わかったわかった。もうやめる。気分転換、夜の公園、お散歩に行こうか？」

「賛成賛成。大賛成！朝からずーっと待ってたの。」  
わがままも時には言うけれど、ノイ子は自分の分もしっかりと心得ている。無理と判ればこらえて耐える。短気なこちらら、見習わなくっちゃ。。。。

#### 遺 伝

「親の因果が子に報い、哀れこの娘は。。。。」  
交配という言葉を知ると、昔、小学生の頃、おっかなびっくり覗きに行った、ろくろっ首の見せ物小屋の、陰に籠もった抑揚の、暗あゝい感じの呼び込みの音が、記憶の底から蘇ってくるのは、これも昭和一桁のせいか。

ろくろっ首の女の子は、友達の友達の、またその友達の友達だったりして、六尺余りの大いたち（実は、板・血）なんぞとご同様の、たわいもない仕掛けの底はすぐに割れたけれど、「親の因果が子に報い。。。。」という、因果関係だけは何故か心に深く刻みつけられている。

えんどう豆や染色体の話を持ち出すまでもなく、親の遺伝子は間違いなくその子孫に受け継がれて行くのが世の定め。。。。だったのだが、最近はいオテクノロジーとやらいう、使い方によっては、ろくろっ首なんぞとは比較にならないほど、恐ろしい一面を含んだ生物学の分

野が誕生してきているようだ。劣悪な遺伝子が残るのは困るけれど、今のところ、蛙の子はやっぱり蛙の方が安心できる。クローンなんてやらで、同じ顔・同じ身体付のラブラドルばかりが巷に溢れたら……。家の子どれだかわかんない！ブルブル。ノイ子も身震いするだろう。

好むと好まざるとに関わらず、そのうちには、先天的に与えられる遺伝的形質を選択する時代が訪れるのかも知れないが……。ラブラドルの繁殖をしようと考えのなら、劣悪な遺伝子を残すと思われる計画は、絶対に避けるべきである。

ラブラドル・レトリバーを含む中・大型の洋犬の繁殖で、最近よく耳にするトラブルは、股関節の形成不全によるものである。大腿骨の付け根の丸くなった部分と、それを受け止める寛骨のお椀の部分が正常に形成されず、歩行に支障をきたす。これは、遺伝による先天的な骨格の異常である。これは、小型犬にも少なくはないのだが、体重の軽い小型犬は、症状が目立たないのだが、体重の負担が掛かる中・大型犬では、症状が顕著に歩き方に表れる。

生まれた仔犬の歩き方に、不自然さが表れてくるのは、三ヶ月を過ぎてからである。体も大きくなり体重の増えてくる六ヶ月頃になると、正常に形成されていない股関節は体重を支え切れなくなり、歩き方の異常ははっきりする。この頃、仔犬たちは、すでに繁殖者の手を離れているのが普通である。異常を発見した飼い主は、病院でレントゲン写真を見せられて愕然と

する。股関節形成不全が遺伝によるものであるという知識のない繁殖者、あるいは、知識はあってもそれを隠して金儲けのために交配する繁殖者の中には、これこの通りうちの子に責任はありませんと、異常の表れていない親犬を示し、仔犬の飼い主の飼育法を挙げつらって、責任を逃れようとする者さえいる。親犬の牡と牝の飼い主が違う場合には、そこでもトラブルが発生する。

他の病気と同じように、遺伝子を持っていても、すべての子に形成不全の症状が表れるとは限らないのである。同腹の兄弟姉妹であっても、症状が出る子もあれば出ない子もある。しかし遺伝子はしっかり受け継がれているから、親にその症状が見られなくても、発現することがある。一歳を過ぎてから、症状が表れる子もいるから、足取りには常に気を付けている必要がある。

同年齢の子が元気に飛び回っているのに、歩きたがらない、すぐ座り込む、などという時は、痛みを感じているはずである。後足の運びを注意して見る必要がある。痛みに強く、活発なのがラブラドルである。よほどのことがない限り、歩きたがらなかつたり、座り込んだりはしないものである。「家の子は、おとなしいから・・・。」という前に、股関節のことを考えてみる必要があるだろう。異常を感じたら、一刻も早く信頼できる獣医さんに相談することをお勧めする。

症状の軽い子の場合、骨格の不完全な部分を靭帯や筋肉がカバーして、日常生活は支障なく営めるようになる。そんな子の場合には、体重が増えすぎないように気を配るとともに、駆け足や階段の上り下りなど、少しでも股関節に負担のかかる運動をさせないなどの注意をしてやることである。

症状の程度によっては、外科手術などに頼ることになる。無知な訓練士の中には、たくさん走り込ませれば早く筋肉が育つなどと、より激しい運動を勧める者もいるけれど、これはとんでもない大間違い。何でもかんでも、すぐ外科手術を勧める獣医さんも、また、要注意である。

歩くのが相当辛そうに見えていた子でも、飼い主のたゆまない努力で、一見正常に見えるようにはなるけれど、こういう子は絶対に繁殖に使ってはいけないことはいうまでもない。

自分の家の娘にも一度は可愛い赤ちゃんを持たせてみたいと思うなら、お婿さんを探すキュービット役は、飼い主のしなければならぬ、先ず第一の重要な仕事である。飼い主の中には、お婿さんのチャンピオン賞暦に気を取られる人も多いけれど、その子の血統にチャンピオンがどれぐらいいるかなどということよりも、股関節形成不全の子が出ていないかという点の方を、慎重の上にも慎重に調べることが大切だ。しかし、この調査はなかなか難しい。問い合わせでも簡単に教えて貰えるものではない。信頼できる飼い主の所、すでに正常な子供たち

のいるお父さんなら心配はいらないけれど、たまたま公園で知り合った男の子、なんていう場合は、悪意はなくても要注意である。

お嬢さんは時間をかけて選ばないと、かわいそうな生命を誕生させることになる。股関節に欠陥のある子を誕生させないためには、交配を司るキュービットたる飼い主の責任は、この上なく重いのである。

#### 環境

「家庭犬の王様」といわれるラブラドル・レトリバーの、利発で、優しく、おおらかで・・・といった、数々の優れた形質も、代々引き継がれてきた遺伝子によるものだ。しかし、すべてのラブラドル・レトリバーが持つて生まれてくる数々の優れた形質も、飼い主によって与えられる環境が悪ければ、歪んでしまう。

「先生、ノイちゃんのお家どこにあるの？」  
女房殿の所にピアノを習いに来る小学生が、わが家の狭い庭を見て訪ねる。庭で日向ぼっこ中のノイは振り返って、クリクリお目々で女房殿の答えに耳を澄ます。

「これがノイちゃんのお家よ。」

「ノイちゃんどこで寝るの？」

「二階にベツトがあるのよ。」

「ふーん。それじゃ、先生たちのお家どこにあるの？」

「！。。。ノイちゃんのお家に先生たちも住んでるの！」

ノイは、当然という顔をして昼寝の続きに戻る。辛夷の木が影を落とし、小さな芝生には蝶が舞う。何の変哲もない平和な昼下がりの光景のだが、低学年のその小学生にとって、庭の片隅に在るべきはずの犬小屋が見当たらないのは、常識外のことらしい。

犬になりたくなかった犬の典型、ラブラドルは、人間べつたりの性格の持ち主である。その性格は、人間と居住区をともにするのに極めて適している。図体は決して小さくはないけれど、家族の様子を客観的に観察していて、それぞれが何をしようとしているのか、敏感に察知して行動するから、たとえ狭い部屋の中でも、彼らの動きは邪魔にならない。ちょこまかと無駄な動きを示すのは、短い仔犬の一時期だけである。といっても、これは産まれてから二〜三ヶ月を、どのような環境の中で過ごしてきたかで大きく違ってくる。何時も家族と一緒に家の中で、家族の一員として扱われ、心配事もストレスもなく暮らしている母親から生まれてきた仔犬たちは、情緒的にも知的にも、母親の体内にいる間から、何かを受け継いでくるようだ。人間の産婦に、胎教が大事とされるのと同じことだろう。こうした子たちは、たしかに野性味には欠けるけれど、ラブラドルには、もともとあんまり野性的な面は備わっていない。



仔犬たちは、食事・トイレ・入浴と、全てを小間目に世話してくれる人間と、語りかけるその言葉を、驚くほどの短期間で、理解するようになる。それが、人間と違って、与えられた天命の短さをカバーする野性の名残なのだろうか、誕生してからの一〜二ヶ月間の、仔犬たちの知能と肉体の発達は、人間の赤ちゃんの三年間を一気に駆け抜ける。人間の性格は三歳までに形造られるといわれるけれど、犬たちの性格は、どうやら一ヶ月半までに決まるようだ。

人間の言葉や感情を微妙に理解する能力に卓越するといった、知能面ばかりでなく、汚れに対する人間の対処から、清潔感をも身に付けるようである。居住区が一緒だと、敷物の取り替えやトイレの片付けも、自然小間目になる。したがって、点検回数も多いことになり、異常があれば早期に見え、早期治療が可能となる。外見には異常が見えなくても、どこか具合が悪ければ、ちよつとした動作の違いで、すぐ気が付いてやることができ、何事につけても大事に至ることがない。

ただし、家の中での繁殖には大きな落とし穴も隠されている。一つは日光浴不足から起きる問題であり、もう一つは、滑り易い床によって引き起こされる、骨格異常の問題である。

犬たちが、太陽光線からビタミン類を合成していることは知られているが、日光浴が足りないとクル病などの危険もある。クル病は、股関節形成不全と同じような症状を示すことがあるから要注意。今年の夏は、炎天下に太陽光線を浴び過ぎて、日射病にかかった犬たちが、異常

に多かったと報じられていたけれど、適度の日光浴は成長期の仔犬たちにも欠かせない。家の中で生活している子には、ガラス越しではなく、外気の中で直接太陽の光線に触れる時間を設けてやる必要がある。

今流行のフローリングの床は、嫌なダニなども付かなくて、清潔に保ち易いけれど、よく滑る床は、歩き始めた仔犬たちのスムーズな歩行を妨げる。手足の握りが開いて、べたべた歩きになることから始まって、肘が外に出たり、後足が外を向いたり、関節や骨格に狂いを生じがちである。大理石やタイル、コンクリートの上にコーティング剤を塗った場所など、床が滑り易い生活空間で暮らしている子たちには、無理なく歩いたり走ったりできるように、敷物を敷いてやる心くばりが必要である。これは繁殖者だけの問題ではない。生後二ヶ月ぐらいの仔犬は身体ができてくる一番大事な成長期、仔犬を譲り受けた人も、滑り易い床には、くれぐれも注意することである。繁殖者の家でいくら注意深く育てられてきても、成長の盛んな時期には、異常が生じるのも短時間である。滑る床が、骨格を狂わせるような、重大な結果につながることは露知らず、遺伝のせいにしてしまう人もいるが、それではかわいそうな仔犬も、良心的な繁殖者も浮かばれない。

繰り返し言うけれど、「無知は罪悪」なのである。日光浴や滑る床だけではなく、ラブラドルたちと一緒に生活して、じっくり観察していれば、彼らにより良い環境を与えてやるに

はどうすれば良いか、自然に知恵も湧いてこようというものである。

## 縁

無邪気に澄み切った目で見上げ、千切れんばかりに小さな尻尾を振り動かす仔犬たちのあどけない姿に、生涯の安泰を願わない繁殖者はいない。

「一度は恋をさせてやりたい。」

「可愛いこの子の赤ちゃんが欲しい。」

飼い主が繁殖を思い立つ動機は様々だが、そんな想いに一番重いブレーキをかけるのが、産まれた仔犬たちの将来に対する危惧である。丁寧に繁殖し、手塩にかけて育てれば育てただけ、その危惧は大きくなる。ラブラドルは多産系、健康な状態なら、一回のお産で十頭前後の赤ちゃんに恵まれる。数が多くても、世話をするのは楽しい面倒である。今日も無事！目が開いた！ちっちゃい歯が生えた！欠伸した！笑った！鳴いた！と騒いでいるうちに、繁殖者の手元にいる二ヶ月間はたちまち過ぎる。日増しに成長してゆく仔犬たちを、可愛いからといって、全部残しておくわけにはいかないのだ。

「信頼できる飼い主が、十人以上見つかったら、赤ちゃんを産ませたい。」

というのが、繁殖を思い立つ人の本心だろう。新聞・雑誌・告知板・友達関係・親類縁者など

などなど、思いつく限り手を尽くしても、同時に十軒以上の信頼に足る家庭を見付けるのは、よほど恵まれた交友関係を持つ人でない限り、至難の技である。生き物に対する個々の人間の考え方は、よほど深く付き合ってみないと判らない。良くも悪くも意外な思いに悲喜こもごもがあるものだ。

かくして多くの繁殖者は、

「まあ！ 可愛い。今日からあなたの家族ですからね。」

と危なげな手つきながら、しっかりと仔犬を抱いて帰って行く新しい飼い主が、理想的な愛犬家であることを願い、時々逢ったり連絡を絶やさないとを約し、万感の想いを込めて見送ることになるのである。

十頭の仔犬たちは、十通りの家庭に入り、十通りの犬生を歩んで行く。オムニバス映画にでもしたら、それぞれの家庭でそれぞれのラブラドルたちが送っている生活は、十通りの魅力ある画面を埋めることだろう。人間の側に問題がない限り、すべてのラブラドルたちは、その順応性の良さを発揮して、どこか家庭にでもすぐに馴染んで、大切な家族の一員となり、平和に暮らして行けるはずである。しかし、中には不幸な巡り合わせに、悲しい思いを噛みしめなければならぬ子も生まれてくる。

「ノイよ、困ったね。どうしよう。あの子、相変わらずお散歩に連れてって貰えないんだっ

て。お散歩は何より大好きで、毎日楽しみに、じーっと待つてるんだからって何度も言ったのね。○○ちゃん今はノイより大きな身体してるけど、ノイが五年前に産んだの覚えてるよね。」

「フー……。」

ノイはため息をつく。自分の産んだ子供たちを、どうやって記憶しているのか定かでないが、暫く逢わなかった子供たちに対しても、ノイの態度は他の子供たちに対するものと、明らかに違っている。ノイは、別に「わたしがママよ！」と歌っている様子はないのだが、子供たちの方もすっかり母親を覚えていようだ。しばしば逢う子はもちろんだが、時々わが家で話題に上がる子供たちの名前も、記憶につながっている節がある。だから、○○○の名前と「お散歩」の言葉に、ノイのお耳は敏感に反応する。ノイの瞳を、悲しみがよぎる。

なんだかんだと言っても、連れ添った飼い主。事情が変わったからといって、そのまま恵まれない環境に置かれるのと、新しい飼い主のもとで恵まれた環境に移れるのと……。どちらがその子にとって幸せか。賛否両論があるだろう。

人間なら、離婚だって家出だって、自由にできるけれど、じっと耐えていなければならない立場を考えると、あの子の生命をこの世に送り出した以上、何とかしてやらなければならない責任は、繁殖したふたり+ワンにある。結論を出さなければならぬ。ノイは、めそめそぐ

ちやぐちや言ってるの大嫌い。

「これ以上任せておけない。返して貰う。」

ふたり+ワンは、そう結論を出した。辛い結論であることに間違いはない。

「よかったよかった来てくれたー。」

身体を擦り付けて喜色満身の大歓喜。門口を出ても、後ろを振り返ろうとしない○○○。わが家の車に喜んで飛び乗る姿を見ると、涙が出る。

「御免ね、○○○ちゃん。人を見る目が甘かった。今度は好い人、一生懸命探すからね。」

「うん、お帰り。」

ノイ母さんは、そつと居場所を空けてやる。

「ノイノイ、かわいいそうなんだから可愛がってやるのよ。」女房殿がノイを抱きしめながらわけを話す。抱きしめられているノイを見て、○○○の、心なしか悲し気な目に、羨望の色が滲む。

その後、ことある毎に女房殿に抱きしめられて、○○○はすっかり満ち足りた顔付きになり、行動にも落ち着きが見えてきた。赤ん坊から大人まで、ラブラドルも人間も、心の空白はスキンシップで少なからぬ部分が満たされる。

○○○を抱きしめてみるとお耳が臭い。どうやら外耳炎らしい。点耳薬で早速治療。三日で

完治。

ベロベロしに来るとお口が臭い。どうやら歯磨きをして貰っていないらしい。アーンさせる  
と歯石がいっぱい。黄色を通り越して茶色で分厚くこびりついている。スクレーを取り出し、  
ノイに、モデルをお願いする。ノイがやって貰うことはなんでも、自分にもして欲しそうにす  
るから、モデルの効果抜群。獣医さんでは、麻酔をかけなければとても取れない大量の歯石  
も、たちまち綺麗に。慣れない歯ブラシは、やって欲しい癖に、むにゃむにゃ遊びを入れる。  
文句を言われながらも、磨かれた歯は、若いだけに真っ白ピカピカ、新品並み。

玄関の硬いタタキに寝そべるのが好きだったから、肘には岩のようなたこができていた。そ  
こに湿疹もできている。女房殿は毎日、薬箱を抱えてご回診。

本物の獣医さんにも来診を仰いで、各種の予防注射や虫下し。どうやらお腹にいっぱい虫が  
居たらしい。バサバサの毛に艶がない。ノイ子と同じようにシャンプーをしても。ノイ子と  
違ってバサバサだった毛が、虫が下りた後は、しなやかになり艶も出てきた。

待望のお散歩、伸び過ぎた爪が邪魔してべたべた歩き。散歩に出ない↓舗装道路を歩かない  
↓爪が適当にすり減らない、の悪循環がなせる技。何かに引っ掛けそう。怪我でもしたら大変  
だ。早速、女房殿は爪のお手入れガールに変身。一度には切れないから、毎日少しずつ様子を  
見ながら根気良く爪の先を削り落とす。長過ぎた爪が普通になると、開いていた指の握りも

しっかりしてきた。

ノイ母さんと過ごして一ヶ月。毎日一緒にお散歩に。来たばかりの頃は、八歳のノイと同じ距離のお散歩に、帰った途端にへたり込み、顔を左右に振りながら、ハアハア激しい息使い。どうやら運動不足で心臓の周りに脂肪が溜っていたらしい。無理をさせないように様子を見ながら、食事内容に注意を払い、毎日の散歩を続けるうちに、それもすっかりなくなった。

そして、シンデレラの運命が待っていた。

望まれて、今は、ノイが羨むほど、愛に満たされた生活。毛艶ピカピカ、肉付きしっかりのシンデレラ・ボーイ。三日に空けず電話が掛かってくる。

「もしもし、今日は〇〇〇ちゃんがね。。。」

「あら、まあ。。。。！」

幸せの電話である。女房殿の声も一段と明るい。

「ノイ子よ乾杯。今宵の酒は特に美味いぜ！」